

Nara Women's University

東アジアでのデュルケーム受容と「圧縮された近代」

| | |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-11-02 キーワード (Ja): デュルケーム, 社会学史, 東アジア キーワード (En): 作成者: 中倉, 智徳 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10935/5514 |

東アジアでのデュルケーム受容と「圧縮された近代」

中倉 智徳

はじめに

2017年、エミール・デュルケームの没後100年を迎えた。この100年のあいだ、学問的にはデュルケームは何度も「ルネッサンス」している。東アジア、とくに韓国・中国・台湾においては、どのようにデュルケームが受容されてきたのだろうか。藤吉圭二をリーダーとし、林大造、速水奈名子、そして中倉智徳をメンバーとする本科研の国際比較班では、東アジア、そしてスペイン調査によって各国のデュルケーム受容を検討してきた。本報告では、とくに東アジアに注目し、まず各国での社会学の歴史を先行研究によって概観し、そのなかでのデュルケーム受容の一端を検討したい。

とくに注目すべき点は、東アジアでもデュルケームは「死んでいる」という証言がある一方で¹⁾、中国社会、韓国社会に対して、現在において直接デュルケームの研究が利用できるという主張が、一部で提示されていることである。韓国のキム・ミョンヒ（建国大学・研究教授）がその自殺論を政策的に応用しようとしているし²⁾、中国についても、羅東耀がアノミー論を中国社会に直接用いることが可能であると論じている。現在の東アジアにおいて、デュルケームは、別の仕方では「生きている」のではないだろうか。ここでは、「ポスト西洋社会学 post-western sociology」論と「圧縮された近代 compressed modernity」仮説の視角から検討することで、アジアが「遅れて」いるといった視角からではなく、各地の認識論的自律性を担保した社会学史の可能性へと開いた議論を展開したい。

1 東アジアの社会学の歴史概観

デュルケーム受容についてみる前に、東アジアの社会学の歴史について簡単に触れておこう。台湾、中国、韓国では第二次世界大戦とそれに先立つ日本による占領・侵略、そして戦後の政治体制が大きな影響をもたらしている。

1.1 中国の社会学史

中国の社会学の成立は1900年前後に日本を經由して社会学が伝播してきたことに遡るが（星 2015: 7）、1920年代～1930年代においてはアメリカ農村社会学の影響下での社会調査が主流となり、英文の研究シリーズが刊行され、分野によっては国際的には日本の社会学よりも「はるかに」よく知られていた（福武 1979: 61）。穂山によれば、1930年代に

はフランス・リヨン大学に留学した柯象峰がガブリエル・タルドの社会学を中国に導入しているが、フランス社会学は当時の中国では傍流にとどまった(穉山 2015: 115)。その後、費孝通(Fēi Xiàotōng)が述べているように、日中戦争によって、社会学者が奥地の村の疎開せざるを得なくなったことで、中国の「現実」に直面し、英米系社会学の理論をそのまま適用できないということを否応なく気付かされることとなった(福武 1979: 61)。日本の敗戦後、そのまま再出発が期待されたが、1949年の中華人民共和国の成立後、マルクス主義的社会科学の一部門としての社会学となり、「社会学」というディシプリンの名前は用いることができなくなった。中国社会学研究会の発足によって中国社会学が「復活」したのは、それから30年後の1979年のことであった(福武 1979: 64)。

矢澤修次郎およびLi Peilinによれば、90年代以降、中国社会学では「ノーマライゼーション」がスローガンとなり、社会学を「通常科学」化することが目指された(矢澤 2013: 16; Li 1992: 23)。これによって、アメリカ社会学の影響の下で質問票をもちいて量的調査を行なうものが多く、現在でもこの傾向が続いているとされる。その一方で、現在の急激な経済発展と制度変化による中国社会のかかえる「社会的矛盾」が、古典社会学がすでに「直面していた」問題であるとして、「古典への回帰 *returning to classicism*」が叫ばれるようになり、デュルケームやヴェーバー、マルクスに再度注目が集まった(Li 1992: 24)。この「回帰」の背景には中国社会への批判もあったとされる。

1.2 台湾の社会学史

蕭新煌(Hsiao Hsin-Huang)の台湾社会学の動向に関する論考によれば、台湾の社会学は1930年に中国大陸で成立した「中国社会学社」の大会を1951年に開催し、組織的には継承したと言われている(蕭 1992: 113)。これは、解放後の台湾社会学の「回復」であり、1949年の「新中国」成立直後に大陸で「ブルジョア階級の学問」として社会学が禁止されたことに由来する。しかし、蕭によれば、台湾社会学が「回復」しはじめた1950~60年代には、中国社会学の伝統の継承は困難であった。その理由は、(1)中国大陸の主流の社会学者が台湾に来なかったこと、(2)政治的な原因のために社会学者の研究を教科書として使えなかったこと、(3)中国大陸の社会学のなかで重要だった小コミュニティの現地調査が、言語的問題により継承できなかったことである(蕭 1992: 103-104)。その後台湾社会学が大きな影響を受けたのはアメリカ社会学であった。1982年時点で、台湾の社会学者の多くがアメリカで学位を取得しており、その教育課程やテキストもアメリカ社会学を模範としていたとされる。しかし、1970年代中期以降の台湾社会学は、中国とアメリカとの国交正常化をうけて、アメリカ社会学の完全な「模倣」から逃れるべく、1980年代半ばには、ヴェーバーやパレート、マンハイム、パーソンズなど、社会学の古典が翻訳され、相対化がはかられた。さらに、「社会学の中国化」がスローガンとされ、歴史を踏まえた独自のアイデンティティを模索するようになっていったとされる(蕭 1994: 128-130)。

1.3 韓国の社会学史

Park Myoung-Kyuによれば、韓国の社会学は、20世紀初頭に「西洋の思考体系」として導入されたが、本格的に制度化されたのは、1945年日本の支配からの解放後のことである(Park 1996: 27)。ソウル大学が1946年に創設され、最初の社会学部が作られた。同年金日成大学が創設されたが、社会学部は存在しなかった。ソウル大学社会学部では、コントやサンシモンの学説が紹介され、社会の再組織化が主張された。また、アメリカ社会学の強い影響化の下、社会学のプロフェッショナル化がなされ、1957年には韓国社会学会が創設された(Park 1996: 28)。その後、1961年から1979年までアメリカ社会学の影響下で制度化が推し進められる。構造機能主義の影響や、社会調査の方法論がさまざまな社会問題へと適用された。ただこのことは、韓国の歴史的なリアリティを無視することに繋がったため、「現地化 indigenization」が主張されることにもなった(Park 1996: 28-29)。軍事政権からの民主化が起こった時期を挟む1980年から1989年の間には、階級闘争史観の重要性が再度高まったことにより、マルクス主義社会学の翻訳が進んだ。同時期に社会史的アプローチが導入された。これらによって、西洋社会学の理論的フレームワークや方法論的なテクニックが、「韓国社会学に非適合的」とであるという問題が認識された。1980年代に、社会学部が50大学ほど増え、社会学博士号取得者の数も増大していくことで、制度化がより進められていった(Park 1996: 29-30)。1990年代以降は、グローバル化への対処および社会学の新たなアイデンティティが探求されていくこととなる。この時期は、ハーバーマス、ギデンズ、フーコーらが影響力を増していった。この時期から、西洋社会は理論的源泉としてだけでなく、実証研究の対象にもなっていた。また、韓国の急激な経済成長から、ヨーロッパやアメリカのコリアンスタディーズが増大していった(Park 1996: 30)。

1.4 概観と視角

以上、非常に粗いものではあるが東アジアの社会学の歴史を概観してきた。先ず概観にとどまらざるを得ない理由として、東アジアという一語で語られる地域のなかの歴史的、言語的、文化的な多様性が理解の障壁としてあることを指摘しておかねばならない。多くの情報を英語文献や日本語訳された文献に頼らざるを得ず、地域的近接性の利点を十分に活かしている状況にあるとはいえないだろう。十分な東アジアの社会学史を可能にするためには、東アジア地域での社会学者のより活発な交流と、研究成果の英語化や、各言語同士での成果の翻訳紹介のさらなる活性化が必要であろう。

そのため、この荒い概観で言えることは多くはないが、共通して描かれているのは、二つの段階であるだろう。第二次世界大戦後に、(1)とくにアメリカ社会学の影響を受けつつ、「ノーマル科学」としての発展を目指してきたことである。そして、(2)アメリカ社会学の直接的な導入が一定の成果をみせたあとで、直接的な導入への反省があり、「現地化」とともに、社会学古典への関心が高まったことだろう。しかし、その時期や背景についてはそれぞれに異なっていることがわかる。この共通性と差異をどのように認識するかが、

社会学史を描き出す際には重要な点となりうる。この点について、中国における地震被害者へのフィールド調査や、東アジアの社会学の歴史を検討している Laurence Roulleau-Berger は、近年の論文のなかで、社会学史も「エスノセントリズム」に陥らないことが重要だと指摘している(Roulleau-Berger 2018)。西洋の社会学こそが正当で他地域を「遅れている」といった単線的な学説史ではなく、それぞれの地域の「認識論的自律性」を認めた社会学史を描くために、「ポスト西洋社会学 Post-Western Sociology」という概念を提唱している。「グローバル社会学史」や「国際社会学史」ではなく、あえて「ポスト西洋社会学」と名付けたところに、強調点を伺うことができる。その一例として Roulleau-Berger は、1980年代以降の中国でのシカゴ学派受容と、フランスにおける同時期のシカゴ学派の受容と新しい都市社会学の形成の同時代性や問題関心の共通点と差異を論じている。このような例によって、西洋／東洋といった区分を越えて、各地域の社会学の認識論的自律性の多元性や多様性といった観点からの社会学史の可能性を提示しているといえるだろう。比較社会学史を描こうとするとき、このような視角はおおいに参照され、検討されたほうがよいと考える。

2 東アジアでのデュルケーム受容

ここまでの概観を踏まえた上で、東アジアでのデュルケームはどのように受容されていたのかを、これも非常に荒い概観にならざるを得ないが、次に見ていこう。

2.1 中国のデュルケーム受容

星明によれば、中国では、デュルケームは20世紀初頭においてすでに翻訳されている。『社会分業論』が、1925年に『社会学方法論』という題で、1935年には『社会分工論』という題で翻訳されている。1979年の中国社会学の「復活」後、改めて翻訳がなされた。デュルケームの著作は大半が翻訳されており、『社会学的方法の基準』が1988年、1995年、『自殺論』が1988年および1996年、『宗教生活の基本形態』が1999年、『社会分業論』が2000年に刊行されている。

中国におけるデュルケームに関する研究の数を調べるために、中国学術雑誌全文データベース(CNKI)において検索した。先ず”Durkheim”で検索したところ、358件であった。また、「デュルケーム」の中国語表記は複数あるようである。「迪尔凯姆」で検索したところ、1322件ヒットした。同様に「涂尔干」が2058件、「杜尔干」が25件であった。その研究の動向全体を把握することは困難であるが、一例をあげれば、羅東耀は、その研究ノートの中で、中国における犯罪の原因の分析として、デュルケームのアノミー概念を直接応用している(羅 2001)。羅は、1980年以降の中国の急激な経済発展に伴う社会変化が、19世紀末のフランスにおいて、先進国に追いつくべく規制緩和による経済発展が志

向される一方で、従来の社会規範が失われて欲望が亢進していった点において近似しているという(羅 2001: 162)。羅は、Li が指摘している「古典への回帰」と共通した問題関心を有していると言えるだろう。

Rouleau-Berger (2018) も中国におけるデュルケーム受容を検討しており、とくに中国企業における「道徳」と「経済」の不可分性に注目した研究や、国家と個人のあいだでの中間集団の重要性の指摘や、「正しい」社会組織は成員の全員の平等と自由を保証しうる合意に基づくものだといったデュルケームの議論を中国の状況にひきつけて検討した研究、デュルケームの「自殺理論」が近代社会を理解するために重要であり続けていることを指摘し、彼の議論が近代の「多角的分析」を可能にすると論じる研究などを紹介している(Rouleau-Berger 2018: 38-40)。

2.2 台湾のデュルケーム受容

メンバーの速水奈名子が蕭新煌教授に行ったインタビュー成果によると、デュルケームは古典社会学の重要人物として取りあげられるが、授業で取り扱う比重はさほど高くないとされる。またデュルケームは社会学理論の基礎、とくに経験的調査のための方法論の基礎を築いた人物として理解されている。やはりアメリカ社会学の影響が強く、その経験的調査の基礎づけた人物としての評価が大きいようである。著作の翻訳は『社会学的方法論』が1929年に訳されたことを嚆矢として、1960年代から1990年代にかけて、かなり多くの異なる版として刊行されている。その他、『宗教生活の基本形態』が1992年および1999年に訳され、『社会分業論』が2000年、『自殺論』は比較的近年になってからの2008年に翻訳されている。データベースでデュルケーム研究の数について調べたところ、臺灣博碩士論文知識価値系統(National Digital Library Theses and Dissertations in Taiwan)でデュルケームの台湾表記である「涂爾幹」で検索すると22件であった。台湾人文及社會科學引分索引資料庫(Taiwan Citation Index-Humanities and Social Sciences)で同様に「涂爾幹」で検索すると、312件であり、“Durkheim”で検索すると938件であった。

社会学の研究ではないが、公衆衛生学の研究のなかで、台湾の自殺女性において、結婚経験や出産した子の数が多いほうが、自殺しづらいという結果がでてきていることについて、デュルケームの議論が確認されたとして参照されている研究もある(Yang 2010)。その解釈については議論はあろうが、やはりデュルケーム自殺論は、現代台湾においても受容され、参照されているといえるだろう。

2.3 韓国のデュルケーム受容

韓国においては林と中倉がインタビューしたキム・ミョンヒ研究教授によれば、現在、韓国社会学会において理論社会学は「完全に死んでいる」状況にあり、フランス社会学の豊かさはあまり紹介されておらず、デュルケームに関する研究グループも存在していない。

ただし、韓国教育學術情報院(Korea Education & Research Information Service, KERIS)の

データベース RISS では、“Durkheim”での検索結果が 2776 件、韓国語表記である「뒤르켄」での検索結果が 429 件であった。翻訳については、キム研究教授によれば、1990 年に『自殺論』と『社会分業論』の抄訳、1992 年に『宗教生活の基本形態』、2000 年に再度『自殺論』、2001 年に『社会学的方法の基準』、2012 年に『社会分業論』の全訳が刊行されている。比較的近年のものが多いといえるだろう。

一般的には、韓国ではそれほどデュルケームに関する研究は盛んではないようだ。だが、デュルケーム研究の一例として、韓国における自殺にたいしてデュルケーム理論を用いて分析した Timothy Kang (2017) は、韓国の自殺の増加に対してデュルケーム理論を応用するときにアノミー概念の重要性が指摘されていたのに対し、それに加えてエゴイズムや社会統合の重要性も指摘するものであった。

また、インタビューを行なったキムはデュルケーム研究を活発に行ない、複数の授業でデュルケームを活用している。科学哲学としてのデュルケームの重要性を強調する彼女の理論も興味深いが、ここで注目すべきは、韓国社会で大きな問題となっている自殺についても具体的に応用している点である。彼女は、韓国の自殺防止対策に、デュルケームの知見が活かされてこなかったと指摘する。これまでの自殺対策は、①精神病理学的還元主義（鬱病）、②心理学的還元主義（ウェルテル効果、模倣論）、③経済還元論（1997 年の IMF ショック以来）の三つに自殺の原因を置いて対策をとってきた。しかし彼女は保健福祉部・中央自殺予防センターのアドバイザーとして、センターがメディアで自殺報道を出させないという方針を模倣説に基づいて取ろうとしていたのでそれに反対し、むしろどのように社会的連帯を再構築するかが重要であり、そのための政策的助言を行なっているという。このように、韓国においても、一部においてデュルケームを現在の社会問題の対策として直接適応しようという動向があることは、注目に値するだろう。

それだけではない。理論研究としても、キム研究教授のデュルケーム論は、アン・ローズらの研究を踏まえ、実証的デュルケームと文化的なデュルケームという「二つのデュルケーム」理解を批判し、反還元主義的な社会科学の統合理論を提唱していることを含め、非常に興味深いものであった。これは、韓国において流行した E.O.ウィルソンの提唱した「コンシリエンス」、つまり還元主義的な科学の統合理論への対抗として掲げられている。このように、キムの議論は、たんなる政策的応用だけでなく、理論的な基盤をもった一貫したデュルケーム解釈に裏付けられているものであり、現代のデュルケーム研究として重要でありうる。その紹介が待たれる。

3 おわりに代えて——圧縮された近代とポスト西洋社会学

これまでみてきたように、東アジアの社会学の歴史のなかで、デュルケームは二つの側面をもっている。ひとつは実証研究の基礎づけを行なった人物としての側面である。この

意味では、台湾の Hsiao 教授の位置づけに見られるように、デュルケームは過去であり、アメリカ社会学の方法論以前の人物として位置づけられるだろう。しかし、近代という時代を悩み、生きた人物としてのデュルケームというもう一つの側面である。東アジアは近年急速に経済発展し、政治体制が激変し、伝統的価値観の変容と結びつきながら大きな変化を被ってきた。この数十年でそれぞれに「後期近代」へと至った変化を、Chang Kyung-Sup は「圧縮された近代 compressed modernity」と呼んだ (Chang 1999; 2010)。とくに 2010 年の論文では、後期近代への移行として考えるとき、Roulleau-Berger (2018) の「ポスト西洋社会学」論が示したように、フランスでも同時代的に起こった事態であるとみなすこともできる。

そのようななかで、中国で「古典への回帰」が志向され、急速な経済発展による社会変化に対する批判的観点獲得のための参照点としてデュルケームが再評価されている。韓国でも、自殺対策に対する社会的連帯の重視という観点からのデュルケームが今まさに政策的にも活用できるという評価を受けている。デュルケーム理論の限界もすでに指摘されている一方で、彼の理論の可能性がすべて汲み尽くされたわけではない。日本でも、斉藤愛が憲法学のなかで、ヘイトスピーチに抗する社会の理念としてデュルケームの「個人の尊重」を提示している。東アジアのデュルケーム受容も、社会の多様性が顕在化していくなかで、デュルケーム理論が再度注目される世界的な流れのなかのひとつだとみなすこともできるだろう。各地での政策的な応用も含めて、どのように社会学史を描き出すことができるか。社会学を描き出すための理論枠組みについて、これまで十分に検討されてこなかったように思われる。「エスノセントリズム」に陥らずに東アジアのデュルケーム受容のあり方を概観し描き出そうとするとき、これからどのような理論的枠組が可能なのか検討することが、重要な理論的課題となるだろう。

[注]

- 1) 台湾の状況については、速水奈名子が 2016 年 1 月 6 日におこなった蕭新煌(Hsiao Hsin-Huang)教授に行なったインタビュー調査の成果に依拠している。
- 2) 韓国の状況については、キム・ミョンヒ(Kim Myung-Hee)研究教授に対して、2016 年 9 月 17 日に建国大学にて林大造および中倉が行なったインタビュー調査の成果に依拠している。

[文献]

穂山新, 2015, 「近代中国の社会政策思想——柯象峰の社会経済論と社会連帯主義」『社会学ジャーナル』 40: 113-130.

- 福武直, 1979, 「中国の社会学とその復活」『社会学評論』30(2): 60-67.
- , 1982, 「復活後の中国社会学」『社会学評論』33(2): 92-95.
- 星明, 2006, 「解放前中国の社会学の特徴——社会学の出版物を中心に」『社会学部論集』42: 127-142.
- , 2015, 「社会学にみる日本と中国の関係について——清朝末期から民国末期までを中心に」『佛教大学社会学部論集』60: 1-18.
- Kang, Timothy, 2017, “Suicide in South Korea: Revisiting Durkheim’s Suicide,” *Journal of Social Thought*, 2(1): 3-14.
- Kyung-Sup, Chang, 1999, "Compressed Modernity and its Discontents: South Korean Society in Transition," *Economy and Society* 28(1): 30-55.
- , 2010, "The Second modern condition ? Compressed modernity as internalized reflexive cosmopolitanization," *The British Journal of Sociology* 6(3): 444-464.
- Park, Myoung-Kyu, 1996, "Chapter1: Institutionalization of Sociology in Korea," Su-Hoon Lee ed., *Sociology in East Asia and Its Struggle for Creativity*, Proceedings of ISA Conference for East Asia, 27-32.
- Peilin, Li, 2012, "Introductions : Chinese Sociology in Global Perspective," Laurence Roulleau-Berger & Li Peilin eds., *European and Chinese Sociologies : A New Dialogue*, Leiden & Boston : Brill, 19-30.
- 羅東耀, 2001, 「デュルケムのアノミー論と現代中国における犯罪原因に関する一考察」『人間文化』, 英知大学人文科学研究室紀要, 157-170.
- Rawls, Anne Warfield, 1996, “Durkheim’s Epistemology: The Neglected Argument,” *American Journal of Sociology*, 102(2): 430-482.
- Roulleau-Berger, Laurence, 2018, "The Invention of the Post-Western Sociology,” *Journal of Global Studies*, 5: 27-46.
- 斉藤愛, 2015, 『異質性社会における「個人の尊重」——デュルケム社会学を手がかりにして』弘文堂.
- 蕭新煌著, 星明訳, 1992, 「台湾の社会学（1）——「伝統」の失墜から「中国化」の展望へ」『社会学部論集』, 26, 佛教大学, 103-113.
- , 1994, 「台湾の社会学（2）——「伝統」の失墜から「中国化」の展望へ」『社会学部論集』, 27, 佛教大学, 122-138.
- Yang, Chun-Yuh, 2010, "Association between Parity and Risk of Suicide: among Parous Women,” *Canadian Medical Association Journal*: 182(6): 569-572.
- 矢澤修次郎, 2013, 「文明としての東アジアと東アジア社会学」『日中社会学研究』21: 11-18.

(なかくら ともり 千葉商科大学専任講師)